学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　近世の民衆文化における関羽像の受容

申 請 者 氏 名　　王紫玉

中国の民衆に重視されている関羽の人物像は、明末清初に渡日した華商、僧侶、明の遺臣によって日本に伝えられた。特に、小説『三国志演義』が日本でも受容されるにつれ、関羽は『三国志演義』に登場する人物として知られ、様々な庶民文芸に登場し、一世を風靡した人物となってきた。では、関羽像が近世の民衆に受容されるなかで、変容することはなかったのか、そうだとしたらいかに変容していったのであろうか。

従来の研究においては、近世日本における関羽像の受容に関する研究の問題点として、知識人層や華僑社会を主な対象とした関羽像や関帝信仰についてのものが中心であり、庶民層における関羽像の受容については十分に論じられてこなかったと指摘されている。このような先行研究の不足を補うため、近世日本における民衆文化に焦点を当て、庶民層の視点から捉えられた関羽像を解明することを目的とした。そこで、関羽像が近世の庶民に受容されていったプロセスを踏まえ、近世日本の関羽像が受容された基盤や、従来あまり検討されてこなかった彫刻像、浄瑠璃、江戸の川柳といった民衆文化の中で展開された多様な関羽像に着目し、その受容過程を具体的に分析した。

第一章では、近世以前の関羽像の受容を解明するために、五山禅僧の漢文学作品を編集した『五山文学全集』を研究対象に、中世禅林における関羽像の受容について分析を行った。その結果、『五山文学全集』の中に「関羽威震華夏」という新たな関羽故事があることを見出し、関羽に関する多様な記述の存在を確認した。また、中世禅林における関羽像と、中国唐代の碑文に記された関羽像との共通点についても考察し、両者の間に類似した特徴が見られることを発見した。その中で、関羽は勇武な武将として描かれる一方、忠義に関する言及は極めて少ない点が特徴的であることが判明した。加えて、中世禅林においては、関羽は仏教の伽藍神として受容されておらず、代わりに関羽と似た経歴を持つ別の人物が伽藍神として崇拝されていたことが新たに明らかとなった。当時の知識人層の意識において、道徳的な規範の象徴や信仰の対象とみなされるというよりは、むしろその実際の功績に裏付けられた英雄としての側面が強調されて受容されていた可能性が考えられる。

第二章では、江戸初期から中期にかけての関羽の彫刻像に焦点を当て、黄檗宗の仏師によって日本に伝えられた関羽像がどのように受容されていたかを明らかにした。近世日本では伽藍神としての関羽像が受容されていたが、禅宗の伽藍神の体系が複雑であるため、当時の日本人仏師が伽藍神の違いを見分けることは困難であったと推測される。黄檗宗と

密接な関係を持つ日本人仏師は、黄檗宗の仏師が伝えた関羽像をそのまま用いて、関羽像や他の伽藍神像を制作していた。一方、黄檗様式の影響をあまり受けていなかった日本人仏師は、独自の関羽像に対する理解に基づき、江戸時代以前の禅宗における他の伽藍神像を参考にして関羽像を制作していたことが明らかになった。これらの分析からうかがえる民衆意識としては、庶民の間で関羽の帝王や仏教の伽藍神としての宗教的な側面を受容しながらも、その受容のあり方は多様で、黄檗宗の仏師によって伝えられた関羽像に縛られることなく、柔軟に受容していた点が挙げられる。

第三章では、江戸中期に初演された浄瑠璃『諸葛孔明鼎軍談』における関羽像の受容について詳細に検討し、当時の庶民文化における関羽像の受容のされ方を明らかにした。小説『三国志演義』における勇武で忠義の武将としての側面を踏襲しつつも、日本の庶民文化において物語性や娯楽性が重視された結果、独自の解釈や脚色がなされていた点を浮き彫りにした。特に、その外見や性格に関する表現に関しては、部分的に受容と創作が行われていたことが確認された。また、柔軟な対応を重視する人間的な要素が強調されており、江戸中期の庶民が持つ独自の英雄観が反映されている。さらに、仏教の伽藍神としてよりも、魔を祓う鍾馗と同様の機能を持つ、実用的な信仰対象として認識されていた。その背景には、魔を祓う存在として庶民にとって身近で親しまれた神であったことが影響していると考えられる。柔軟な対応を重視する人間的な要素や、魔を祓う鍾馗と似たような存在としての側面が強調されていた点が、当時の庶民の英雄観や信仰と深く結びついていると考えられる。

第四章では、江戸時代の川柳における関羽像の受容を分析し、江戸後期の庶民文化においてどのように関羽が捉えられていたかを明らかにした。川柳集『誹風柳多留』および『誹風柳多留拾遺』を中心に調査を行った結果、関羽の外見的特徴や武将像、さらには仏教の伽藍神としての信仰が、庶民の間で多様に受容されていたことが確認された。日本の庶民文化において、関羽がすでにやや和風化されたキャラクターとして登場していたため、その外見的特徴が小説『三国志演義』における描写そのままではなく、庶民にとって親しまれやすい形へと変容していた可能性を示している。また、関羽の忠義や勇武に加え、儒学者としての側面も取り上げられ、英雄像が多面的に表現されていたこともわかる。こうした関羽像は、小説『三国志演義』における物語の創作部分が色濃く反映されており、周倉のような架空の人物が頻繁に登場する点からも、『三国志演義』の影響が大きかったことが示されている。さらに、関羽と布袋和尚とを同列に論じる句が確認されたことは、仏教の伽藍神としての関羽像が江戸前期に日本に伝来した後、やはり日本の庶民層に受容されていた可能性を示唆している。

以上を通して本稿が明らかにしたのは、近世日本の民衆文化における関羽像の多様な受容と変容のプロセスである。要するに、元々の中国の正史『三国志』や小説『三国志演義』

に描かれた関羽像が、江戸時代の日本庶民によって自分たちがわかるように作り替えられて独自な解釈で受容されていたことが、各章を通して明らかになった。ただし、本研究で明らかにされたのは、関羽像が中国と異なる形で近世日本に受容されていたことであるが、そのことからさらに当時の庶民のどういうふうな民衆意識の特質を読み取るかということは、今回十分に論述できなかった。しかし、断片的ではあるが、本研究の結果からいくつかの見通しを示すことは可能である。今後の課題としては、こうした関羽像の独自の受容過程から、当時の日本の民衆意識の特質を、より深めて検討していくことが挙げられる。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲　第 173 号	氏　名	王　紫玉
論文題目	近世の民衆文化における関羽像の受容		

（論文審査概要）

序章では、近世日本における関羽像、関帝信仰について、これまで知識人における受容のされ方についての言及があったものの、民衆におけるあり方が不明であるとの問題関心から、その受容のプロセスを、彫刻、文芸作品などを題材にして検討するとの課題が述べられる。

第１章では、中世におけるあり方を「五山文学全集」を素材に考察している。そもそも中国における関羽像は、『三国志』のそれからは変容しており、優れた武将であることに加えて、忠義の代表人物であり、かつ信仰の対象となる守護神としても捉えられていた。しかし中世禅林においては、そうした忠義の象徴や伽藍神としてではなく、戦場における勇武や功績をもつ武将としての側面が受け入れられていたとする。

第２章では、従来、関羽信仰が明末清初に渡日した華商や僧侶らが伝えたとされるのを受け、黄檗宗の仏師が製作した彫刻とその受容のされ方を検討している。まず黄檗宗の仏師が製作した長崎興福寺の関帝椅像は『三国志』『三国志演義』における外見的特徴を備える一方で、京都萬福寺における華光菩薩像が関羽像と誤解されており、近世初期には日本側の関羽に関する認識が十分ではなかったとする。また、日本人仏師が製作した関羽像は禅宗のほかの伽藍神を参照していたともする。これらのことから、当時の関羽についての理解には、日本側の独自の宗教観も混在していたことを見通している。

第３章では、これまで『三国志演義』の和訳本が日本近世の民衆に関羽像を広めたとされるのに対して、文字が読めない階層への受容を考えるために、浄瑠璃本の検討が必要であるとの関心から、『諸葛孔明鼎軍談』に描かれた関羽像を分析している。そして、ストーリー展開には竹田出雲の創作が加わっており、関羽に対して関良という人物を創作して、その人間的な魅力を際立たせていること、一方で仏教の伽藍神としての側面はそぎ落とし武将としてのあり方がもっぱら描かれていることを指摘する。ここでも受容のされ方が、近世民衆が有していた文化的な背景に規定されていたことを読み取っている。

第４章では、民衆が受け取り手であると同時に作成主体でもあった川柳を通して関羽像の受容を考察している。そして川柳にみられる長いひげ、赤い顔、青龍刀と乗馬赤兎馬といった関羽像がその故事がいずれも『三国志演義』に由来していることを指摘する。それら『三国志演義』における関羽像は、より親しみやすい形で近世民衆に受け入れられていたとも述べる。やはり中国におけるものが日本の民衆によって再解釈されていたとみている。

終章では以上の議論が総括される。まず近世以前には『三国志』に基づき、かつほぼ知識人に限定されて受容されていた。そのさい、武将としての英雄像が強調され、宗教的な側面はほとんどなかったとする。それに対して近世になると、黄檗宗の伝来とともに関帝としての信仰や仏教の伽藍神としても受容されるようになる。ただし関羽の外見は日本の仏師たちが独自に解釈したものが民衆には受け入れられていた。やがて中期になると民衆の英雄観や信仰に規定されることで、歴史的な英雄像から物語性や娯楽性を強調するキャラクター像へと変化していった。これらによって、外来の文化が日本の民衆文化に受容されるなかで再構築される過程を浮き彫りにできたと結論づけている。

１．創造性
　関羽、関帝信仰の近世日本における受容のあり方について、これまで主として識字層について取り上げられてきたことに対し、彫像、浄瑠璃、川柳という新しい素材を通して検討することで、民衆における受容を考察した点で新しい。関帝信仰が民衆文化やその宗教観に規定されて次第に姿を変えていったとする指摘もオリジナルなものであり、創造性は達成できている。
２．論理性
　『三国志』『三国志演義』に描かれる関羽像と、日本各地の寺院に伝わる彫像、川柳や浄瑠璃で描かれる関羽像とを比較し共通点と違いとを浮き彫りにしている。そのうえで伽藍神あるいは武将としての性格がどのように表象されているのかを読み取ることで、民衆における受容の特質を考えるという手法をとっており、論理性も達成できている。
３．厳格性
　予備審査において求められた、中国における関羽崇拝の変遷や王や帝に封ぜられることの説明を補筆している。また史料の読みについての指摘に対しても適切に訂正されている。さらに「関羽像」「受容」の概念説明も加えられている。これによって厳格性は達成されていると判断できる。
４．発展性(選択的記述項目)
　本研究で獲得した、関羽像の受容が既存の文化的な枠組みを前提になされたの視角をふまえ、関羽像に限らない中国文化の受容について今後対象を広げてゆくことが期待される。
　以上より、審査委員会の合議によって論文審査を「合」と判定した。

論文審査結果
合・否

審査委員　主　査　（氏 名）森下　徹

（氏 名）有元光彦

（氏 名）佐々木　司

（氏 名）

（氏 名）